

栄村の安田さん、「一目ぼれ」のわら細工制作実演

猫つぐら継承 移住者が挑む

京都府宇治市から栄村に移住した安田深雪さん(54)が村歴史文化館「こうっせ」で、猫の寝床などに使う民芸品「猫つぐら」の制作実演に取り組んでいる。わら細工の入れ物「栄村つぐら」は豪雪地の冬の手仕事として伝わり、県の伝統的工芸品に指定。だが生活道具としての需要が減り、作り手の減少や高齢化が課題だ。美しく整然と編み込まれた職人技に一目惚れした安田さん。「目にする機会が減ったわら細工に親しんでほしい」と話している。

安田さんは宇治市で捨て猫を保護して飼っており、2006年、購読していた雑誌で猫つぐらを知った。かまぐら型の形や手作り感、名前の響きに引かれ、産地を調べて栄村に行き着いた。同年の豪雪で同村が大きな被害を受けた



猫つぐらの制作実演をする安田さん

生活道具の需要減少 作り手平均年齢は70代後半

栄村を産地とする伝統的工芸品は、ともに県指定でトチを手彫りした「秋山木鉢」と高品質のキリで作る「桐下駄」、国指定の手すき和紙「内山紙」もある。だが、いずれも「村内に作り手は残っていない(村商工観光課)。「栄村つぐら」を手がける「村つぐら振興会」も会員9人の平均年齢は70代後半で、販路開拓などに課題を抱えている。

農作業の間に乳飲み子を寝かせておく「ぼぼつぐら」、わらの高い保温性を生かして炊き上がったご飯のおひつを入れる「飯つぐら」、食器保管用の「茶わんつぐら」…。つぐらはかつて

ごくきれいな作品。作ってみたいと思った。

その後、飼い猫を見送ったことや離婚などをきっかけに国内各地を旅し、22年4月に2泊3日の日程で初めて村を訪れた。「どこから来たの」と気さくに声をかけてくれるけれど、必要以上に踏み込んでほこない村民の空気感が心地よかった。6月には村内のシェアハウスに滞在して地域住民とも交流。

空き家バンクで住まいを見つけた、9月に同村に移り住んだ。村民から譲り受けた猫「るり」「べに」と一緒に暮らす。

移住後、村内のつぐら職人らでつくる「村つぐら振興会」に入会。材料の稲わらは天日干しして表面の皮を取り除き、しなやかになるよう木つちでたたいて色や太さをそろえる。丸底の直径約43センチ、猫の出入り口の幅約20センチといった規格に合わせ、形がゆがまないよう編む。力を込めて、わら一本一本を引っ張る作業

は重労働だ。制作に約3週間かかるという。京都にいたころから独学で作っていたが、先輩職人から技術を学んで「奥深さ」を実感した。「好きになった猫つぐらを絶やしたくない」。制作実演を通じて村内外の人にわら細工に興味を持ってもらい、作り手を増やすことにもつながればいいと考えている。制作実演は20、24、25、29、31日の午後1〜4時。見学自由。来月以降の日程は安田さんのインスタグラムで見られる。

農村の暮らしに身近で、冬場のわら細工作りは村内各家庭で見慣れた風景だった。だが、既製品が普及し、農作業の機械化もあって生活から遠のいた。近年のペットブームも追い風となつて猫つぐらは一定の需要があるが、職人の減少には歯止めがかかっている。振興会には養成に向け、冬場に毎月1回、無料の技術講習会を開催。近隣地域からの参加もあり、少しずつ職人が育ちつつあるという。

一方、つぐらの販売を担ってきた一般財団法人・村振興公社は経営難などで19年に解散。販売網整備や販売促進などを含めて振興会が担うことになっ

た。会長兼事務局長の広瀬幸利さん(66)が引き受けるが「すべてを一人でやるのは難しい」とし、村の支援を求める。ホームページの整備も追いついていない。

村は7月、安田さんに伝統工芸の継承に取り組み募集支援員を委嘱した。村教育委員会の担当者は「伝統工芸品を残したい気持ちは振興会と同じだが、生活の中で使ってもらえなければ存続は難しい」と指摘。つぐら作りだけで作り手が生計を立てるのは厳しいため、産業として収入が確保できる新たな取り組みを、振興会と模索していく考えた。(宮沢 久記)

イワナを捕まえて喜ぶ参加者

「一目ぼれ」は、カヌーです。なんてすきかというところ、わんしゅうがおわったなら、ほくりゅううごにこびこめるからです。